

[研究論文] 看護大学生の SNS 利用における
対人コミュニケーションの特徴

松浦彰護¹・坂東美知代²・佐藤美央³・中谷章子⁴

- 1 神奈川工科大学看護学部看護学科
- 2 東京医療学院大学保健医療学部看護学科
- 3 国立国際医療研究センター国府台病院
- 4 茨城県立こころの医療センター

Characteristics of Interpersonal Communication
Use of SNS for Nursing College Students

Shogo MATSUURA¹, Michiyo BANDO², Mio SATO³, Shoko NAKATANI⁴

Abstract

The study aims was to clarify the relationship between SNS utilization and interpersonal communication among nursing college students. The survey was conducted by creating a questionnaire of 46 questions composed of the subject's personal background, SNS utility recognition, and social skills. The survey was conducted on 156 nursing college students enrolled in the Faculty of Nursing at the University the Kanto region, and 150 subjects with valid results were analyzed.

As a result, SNS was used by all subjects and was a necessary tool for the daily life of nursing college students. Nursing college students used social networking services as an easy and convenient way to interact, rather than seeking to build intimate relationships with others and satisfy them. Nursing college students also recognized that they use SNS to understand others and control their emotions. In modern nursing education where ICT spreads, it was considered highly necessary to study learning methods using non-face-to-face communication techniques to enhance social skills.

Keywords : SNS, Nursing College Students, Interpersonal Communication, Social Skills

I. はじめに

わが国では ICT (Information and Communication Technology) の目覚ましい発展に伴ってスマートフォンが爆発的に普及し、SNS (Social Networking Service) が多くの世代に浸透してきている。SNS はコミュニティ型のインターネットサービスとして、対人関係での他者とのつながりを促進し対人コミュニケーションを支援する¹⁾。SNS ではこれまでに一般的であった対面交流ではなく、意思伝達のひとつが文字情報によるネットでのやりとりになるため、多くの相手と同時にコミュニケーションできる「拡散性」、気軽に発信できる「容易性」、相手の情報を迅速に入手できる「即時性」などの特徴²⁾を備えている。ICT 総

研 (2018) による SNS 利用動向の調査結果³⁾によると、2017 年末の推定国内ネットユーザーは 1 億 12 万人と推定されており、そのうちの 72.1%にあたる 7216 万人が SNS を利用していると報告される。利用者は今後も増加すると見込まれており、10~20 代の若年層が最も多く利用している。日常生活での SNS 利用の拡大は対人コミュニケーションの交流形態を大きく変貌させ、特に青少年にとっては友人関係の形成と維持に不可欠なツール⁴⁾となっている。国内の大学ではほとんどの学生が ICT としてスマートフォンを所持するため⁵⁾、SNS は大学内の友人関係の主要なコミュニケーション手段として身近な存在と考えられる。

医療分野では、平成 13 年に厚生労働省が策定した「保

健医療分野の情報化に向けてのグランドデザイン最終提言⁶⁾を契機に ICT 化が推進され、診療情報の電子化、病院情報システムの構築と活用、地域医療との情報連携や共有などへの取り組みが始まった。看護職においても、診療情報の ICT 化の中心としてパーソナルコンピュータ (Personal Computer) を用いた電子カルテシステムが採用され、今では多くの医療施設において看護情報システムや電子化された看護記録が導入されつつある⁷⁾。多職種が協働する医療分野では、地域の介護や福祉、他の医療専門職などとの情報連携が重要であり⁸⁾、看護においても ICT を用いた情報リテラシーの活用と推進による遠隔看護などの効果的・効率的なサービス展開が期待されている⁹⁾。ICT による情報共有と活用は看護の質の向上に結びつくと考えられており¹⁰⁾、今後の看護教育では ICT 情報リテラシー教育が重要となると考えられる。

従来より看護教育では、対人関係を円滑にするための技術としての社会的スキルが看護実践能力に関連することが明らかのため¹¹⁾、教育的な取り組みとして対人コミュニケーション能力の育成を重視してきた。しかし今日の看護大学生では、ICT 化によるコミュニケーション手段の多様化により、対面での他者との関係形成が苦手になったとの指摘がある¹²⁾。社会的スキルの高い者ほど他者への対面による援助要請を行うことが多いとの報告もあり¹³⁾、看護職を目指す学生にとって ICT を用いた対人コミュニケーション能力の育成が重要と考える。そこで看護大学生が用いる SNS でのコミュニケーションの実態を測定することは、看護職に必要な授業構成や内容についての検討をする上で重要な意味を持ち、ICT 化に伴った看護教育のための基礎資料になると考えた。

II. 目的

本研究は、看護大学生の SNS 利用の特徴と、対人コミュニケーションの関係を明らかにすることである。

III. 用語の定義

1. SNS (Social Networking Service)

Safko (2010) のソーシャルメディア 12 分類¹⁴⁾を参考に、「インターネット上で構築される社会的ネットワークを介した対人コミュニケーション手段」と定義する。SNS は、対象を限定する閉鎖型と限定しない公開型¹⁵⁾があるが、本研究では看護大学生世代が多く用いる閉鎖型の LINE、公開型の Facebook、Twitter、Instagram、mixi の 5 種類とした。

2. SNS 効用認知

五十嵐と吉田 (2003)、神野と和田 (2015) の定義^{16) 17)}を参考に、「SNS の利便性をいかに評価し、どのような効用を期待するかといった SNS に対する認知」と定義する。

3. 社会的スキル

菊池 (1988) の定義¹⁸⁾に基づき、「対人関係を円滑にはこぶために役立つ技能」と定義する。

IV. 方法

1. 対象者

関東圏にある総合大学看護学部 に在籍する看護大学生 156 名 (2 年生 74 名、3 年生 82 名)。

2. 調査内容

1) 対象者の個人背景

年齢、性別、学年、SNS 利用の有無、SNS 利用の頻度、SNS と対面の交流しやすさ、公開範囲、自己開示、不特定多数との交流、SNS 危険性、不適切投稿の有無について回答を得た。

2) SNS 効用認知

五十嵐と吉田 (2003) は、携帯メールの利用が対人関係に及ぼす影響を測定する「携帯メールの効用認知尺度 (以下、携帯メール尺度)」を開発¹⁶⁾している。この尺度は 3 因子で構成され、友人関係の形成や親密度の増大がスムーズとなる「親和充足」9 項目、自分の表情や声が相手に伝わらず、また周囲に知られることもなくコミュニケーションができる「利便性」4 項目、自分の行動が他人に見張られたり縛られているように感じる「束縛感・不快感」3 項目の全 16 項目で測定する。「全くそう思わない (1 点)」、「あまりそう思わない (2 点)」、「どちらともいえない (3 点)」、「ややそう思う (4 点)」、「非常にそう思う (5 点)」の 5 件法で回答を求め、得点が高いほど携帯メールの効用に対する認知が高いことを示す。これまでの研究¹⁶⁾では、尺度の信頼性を示す Cronbach の α 係数が .73~.89 と報告されており、内的整合性が保たれている。ソーシャルメディア分類¹⁴⁾における携帯メールの位置づけは、本研究で対象とする閉鎖型 SNS の LINE と同じインターネット (個人間通信) に属しているため^{19) 20)}、携帯メール尺度を利用できると考えた。著作者に許可を得て、携帯メール尺度の項目文中の「携帯電話」を「SNS」に変更し回答を得た。

3) 社会的スキル

社会的スキルの測定は、菊池 (1988) が開発した「社会的スキル尺度 (Kiss-18)」¹⁸⁾を用いた。Kiss-18 は、「初歩的なスキル」、「高度のスキル」、「感情処理のスキル」、「攻撃に代わるスキル」、「ストレス処理のスキル」、「計画のスキル」の 6 因子全 18 項目からなり、信頼性、妥当性が確認されている。社会的スキルが優れている人は、あらゆる面で円滑な対人関係を維持、発展させることが容易であるとされている。使用の際は原版に準拠して、「以下の文章を読んで、あなた自身にどれだけ当てはまるか○をつけて下さい」と教示した。「いつもそうでない (1 点)」、「たい

ていそうでない (2点)」、「どちらともいえない (3点)」、「たいていそうだ (4点)」、「いつもそうだ (5点)」の5件法で回答を求め、得点が高いほど社会的スキルが高いことを示している。

3. 倫理的配慮

本研究の対象となる看護大学生に対し、本研究の趣旨および調査の目的、意義、方法、調査への協力は自由意思で行われるものであり研究に協力しなくても不利益を被らないこと、個人情報保護に努めデータは匿名化し統計学的に処理するために個人が特定されないこと、調査で得られたデータは研究以外の目的で使用しないこと、研究結果を学会発表や論文投稿する場合には施設名や個人名が特定されることのない情報のみを用いて発表することについて説明を行い、同意書に署名し協力の得られた対象者に対し調査用紙を配布し調査を実施した。回答は調査用紙に無記名で記入するように求めた。対象者による調査用紙への記入後は、調査実施場所の2箇所に設置した回収箱への投入を依頼した。回収箱は調査終了後に、研究者が速やかに回収した。

なお、本研究対象者の人権擁護を図るため、研究対象施設の「ヒトを対象とした研究にかかわる倫理審査委員会」で承認後 (承認番号 20180322-27) に実施した。

4. 分析方法

対象者の個人背景は記述統計を行い、カイ二乗検定を用いて学年による差がないことを確認した。他者との交流のしやすさは、「SNSでの交流は、実際に相手と対面するより交流しやすいですか」について1 (はい) を選択した対象を SNS 交流群、2 (いいえ) を選択した対象を対面交流群の2群に分けて分析した。

携帯メール尺度は SNS 効用認知にかかわる 16 項目に対して、閉鎖型および公開型の SNS に共有される部分を抽出し縮約することを目的として、妥当性は因子分析により構成概念妥当性を、信頼性は Cronbach の α 係数を算出し内的整合性を検討した。携帯メール尺度の正規性を Kolmogorov-Smirnov の正規性の検定で分析したところ正規性が否定されたため、ノンパラメトリック解析法を用いた。交流のしやすさによって SNS 効用認知に差が生じるかを検討するため、SNS 交流群と対面交流群の2群の差異を分析し、2群における SNS 効用認知の3因子との関連を確認した。また社会的スキルが SNS 効用認知によって差が生じるかを検討するため、SNS 尺度の中央値で2群に分けた高低群の差異を分析した。

Kiss-18 は信頼性分析を行い、Cronbach の α 係数を算出し信頼性を確認した。SNS 効用認知によって社会的スキルに差が生じるかを検討するために、SNS 尺度総得点の中央値で区分した高低群の差異を分析した。

データの分析には、統計ソフト IBM SPSS Statistics Version25 を使用した。統計学的有意水準は 5% とし、群間比較の際は、Mann-Whitney の U 検定を用いた。

V. 結果

1. 看護大学生の個人背景

看護大学生の個人背景を表 1 に示した。

対象者 156 名の内、回答に欠損がなかった 150 名を分析対象者とした。看護大学生の個人背景は、学年による差は認められなかった。

平均年齢は 19.7 ± 0.7 歳、性別は女性 124 名 (82.7%)、男性 26 名 (17.3%) であり、学年は 2 年生 71 名 (47.3%)、3 年生 79 名 (52.7%) であった。SNS の利用は対象者全てが経験しており、利用頻度は「ほぼ毎日」の利用者が 145 名 (96.7%) であった。交流のしやすさは、「SNSの方が交流しやすい (SNS 交流群)」が 76 名 (50.7%)、「対面の方が交流しやすい (対面交流群)」が 74 名 (49.3%) であった。

表 1 看護大学生の個人背景

		n	%
年齢(歳)	<i>M</i> ± <i>SD</i> (<i>min</i> - <i>max</i>)	19.7±0.7 (19-23)	
	性別		
	女性	124	82.7
	男性	26	17.3
学年	2年生	71	47.3
	3年生	79	52.7
SNS利用	有	150	100.0
	無	0	0.0
SNS利用頻度	ほぼ毎日	145	96.7
	週に3~4回	5	3.3
	週に1~2回	0	0.0
	週に1回以下	0	0.0
交流しやすさ	SNS交流	76	50.7
	対面交流	74	49.3
公開設定	制限有	113	75.3
	制限無	37	24.7
自己開示	積極的	20	13.3
	積極的ではない	130	86.7
不特定多数との交流	有	28	18.7
	無	122	81.3
SNS危険性	全く無い	1	0.7
	あまりない	10	6.7
	ややある	71	47.3
	とてもある	68	45.3
不適切投稿	経験有	11	7.3
	経験無	139	92.7

Note. *N* = 150 ; *M* : 平均値, *SD* : 標準偏差

2. SNS 尺度の信頼性と妥当性

携帯メール尺度 16 項目の回答は、最小値 1 点から最大値 5 点の範囲にあり、平均値は 1.9~3.5 点、標準偏差は 1.0~1.2 であった。項目 28「公共の場所で、他人が SNS をしているのを見ると不愉快である」の平均値は 1.9 ± 1.1 点であり、床効果が認められたため分析から除外した。

表 2 SNS尺度の因子構造

項目	I	II	III
I SNSの親和充足			
4 SNSだと、友達いつでも連絡を取ることができるので、新密度が増す。	.89	-.05	-.09
3 SNSを使っていると、友達の存在がより身近になる。	.78	-.11	-.02
7 SNSを使うことで、友達とのつながりを持てる。	.69	.00	.01
5 SNSによって、対人関係が広がるような気がする。	.62	.22	.06
2 お互いにSNSのIDやパスを教えあえば、友達になれるような気がする。	.49	.09	.12
II SNSの利便性			
11 SNSだと、自分の表情や声が相手に伝わらないので、気楽にやりとりできる。	-.11	.73	.00
12 SNSだと、面と向かって話しにくい相手とも、やりとりしやすい。	-.03	.72	-.04
10 SNSを使うと、周りの人に知られずにやりとりができるので、便利である。	.14	.48	.02
13 大したことのない用事でも、SNSだと気軽にやりとりができる。	.11	.47	-.05
III SNSの束縛感・不快感			
14 SNSによって、自分の行動が常に他人に見張られている気がする。	.03	.053	.83
15 SNSのメールを使っていると、常に他人に縛られている感じがする。	-.02	-.108	.67
<i>Note.</i> N = 150 ; 因子抽出法:最尤法			
	I	II	III
因子間相関 I	—	.55	.13
II		—	.01
III			—

項目 28 を除く 15 項目を対象に、最尤法による探索的因子分析(プロマックス回転)を行った。因子負荷量が.40未満であった項目 13「SNSを使っていると、何となく友達ができそうな気がする」、項目 19「SNSを使うことで、友達とのつながりを持てる」、項目 20「友達と SNS でやりとりをして、さびしさをまぎらわすことができる」、項目 21「お互いに SNS を使っていると、友達になりやすい」の 4 項目を削除し各因子の構成要素を確認したところ、3 因子全 11 項目が抽出された(表 2)。3 因子の意味内容は、携帯メール尺度の各因子の意味内容に相応すると考えられたため、SNS の利用が対人関係に及ぼす影響を測定する尺度として「SNS 尺度」と命名した。SNS 尺度の 3 因子に属する各項目は、携帯メール尺度の 3 因子に属する各項目に対応していたため、3 因子についてそれぞれ「SNS の親和充足」、「SNS の利便性」、「SNS の束縛感・不快感」と命名した。確認的因子分析を行ったところ、適合度指標(GFI) = .94、自由度修正済み適合度指標(AGFI) = .90、比較適合度指標(CFI) = .96、平均二乗誤差平方根(RMSEA) = .06であった。GFI と AGFI は .9 以上であれば適合度は良好、RMSEA は .05 以下が良好、.08 以下は概ね良とされることから(Kline, 2005; 宮崎, 2012) SNS 尺度のデータ適合度は許容できる水準にあると判断した。

SNS 尺度の Cronbach の α 係数を算出したところ、総得点は.78、下位項目では「SNS の親和充足」は .84、「SNS の利便性」は.71、「SNS の束縛感・不快感」は .71 であり、

内的整合性が認められると判断した。

SNS 尺度総得点の平均値は 34.0 ± 6.7 点、中央値は 35.0 点であった。

3. Kiss-18 の信頼分析

Kiss-18 の Cronbach の α 係数を算出したところ、総得点は .91、下位項目では「初歩的なスキル」は .68、「高度のスキル」は.50、「感情処理のスキル」は .61、「攻撃に代わるスキル」は .73、「ストレス処理のスキル」は .67、「計画のスキル」は .74 であり、信頼性があると判断した。

4. 交流のしやすさによる SNS 効用認知

交流のしやすさによる SNS 効用認知の比較を表 3 に示した。

SNS 効用認知について SNS 交流群と対面交流群の 2 群で比較したところ、SNS 尺度の総得点は、対面交流群の平均値 32.1 ± 5.8 点より SNS 交流群の平均値 35.9 ± 7.1 点の方が有意に高い傾向が認められた ($p < .001$)。SNS 尺度の下位項目「SNS の親和充足」は、対面交流群の平均値 14.8 ± 4.0 点より SNS 交流群の平均値 16.7 ± 4.4 点の方が有意に高い傾向が認められた ($p = .003$)。SNS 尺度の下位項目「SNS の利便性」は、対面交流群の平均値 12.5 ± 2.9 点より SNS 交流群の平均値 14.5 ± 3.0 点の方が有意に高い傾向が認められた ($p < .001$)。2 群における SNS 効用認知の 3 因子との関連は見られなかった。

表 3 交流のしやすさによるSNS効用認知の比較

SNS尺度	SNS 交流群 (<i>n</i> = 76)			対面交流群 (<i>n</i> = 74)			<i>p</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>Mdn</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>Mdn</i>	
総得点 (11)	35.9	7.1	36.5	32.1	5.8	33.0	*
SNSの親和充足	16.7	4.4	17.0	14.8	4.0	14.0	*
SNSの利便性	14.5	3.0	15.0	12.5	2.9	13.0	*
SNSの束縛感・不快感	4.7	1.9	4.0	4.8	2.0	4.0	

Note. *N* = 150 ; Mann-WhitneyのU検定

M : 平均値, *SD* : 標準偏差, *Mdn* : 中央値, *: *p* < .05

表 4 SNS効用認知の高低群による社会的スキルの比較

社会的スキル尺度	高 群 (<i>n</i> = 67)			低 群 (<i>n</i> = 83)			<i>p</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>Mdn</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>Mdn</i>	
総得点 (18)	58.2	10.1	58.0	55.2	11.1	56.0	
初歩的なスキル	9.7	2.3	10.0	9.2	2.6	10.0	
高度のスキル	10.1	2.1	10.0	9.3	2.4	9.0	*
感情処理のスキル	9.5	2.0	10.0	8.8	2.2	9.0	*
攻撃に代わるスキル	9.7	1.9	10.0	9.1	2.2	9.0	
ストレス処理のスキル	9.6	2.0	9.0	9.3	2.1	9.0	
計画のスキル	9.6	2.1	9.0	9.5	2.3	9.0	

Note. *N* = 150 ; Mann-WhitneyのU検定

M : 平均値, *SD* : 標準偏差, *Mdn* : 中央値, *: *p* < .05

5. SNS 効用認知における社会的スキル

SNS 効用認知による社会的スキルの比較を表 4 に示した。

対人コミュニケーションに必要な社会的スキルについて SNS 尺度得点の高低群で比較したところ、社会的スキル尺度の下位項目「高度のスキル」は、SNS 効用認知低群の平均値 9.3 ± 2.4 より高群の平均値 10.1 ± 2.1 の方が有意に高い傾向が認められた ($p = .019$)。社会的スキル尺度の下位項目「感情処理のスキル」は、SNS 効用認知低群の平均値 8.8 ± 2.2 より高群の平均値 9.5 ± 2.0 の方が有意に高い傾向が認められた ($p = .027$)。

VI. 考察

1. 看護大学生の SNS 利用実態

SNS は全ての対象者が利用しており、看護大学生の日常生活において欠かせないツールと考えられた。看護大学生は SNS 上で自身の情報を公開することや、不特定多数の他者と交流を持つことには比較的慎重であり、SNS を特定の多数の他者との情報交換に利用していた。また 9 割以上の看護大学生が SNS 利用の危険性を感じており、SNS 上への不適切投稿も自重していた。看護学生を対象とした先行研究¹⁾からも、本研究対象者の SNS 利用の実態は平均的であると考えられた。

SNS の利用目的は、知人の状況を知りたい、人とつながっていたいなどのコミュニケーションを求める理由が多い³⁾。しかし本研究では、SNS の交流のしやすさと、SNS での親和充足は関連しなかった。看護大学生は SNS を利便性のある簡易的な他者との交流手段として捉え、他者との親密な関係や人間関係の満足感を求めているのではないことが推察された。大学生活はこれまでとは違い、様々な地域出身者で構成された多様な価値観や習慣をもつ他者と多くコミュニケーションする。いつでもコミュニケーションを開始できる SNS は、看護大学生にとって日常生活で遭遇する対人関係の形成に必要なツールとして重要な役割を果たしている可能性が考えられた。

2. 看護大学生の SNS 効用認知の特徴

SNS 効用認知尺度の「SNS の利便性」には、「SNS を使うと、面と向かって話しにくい相手とも、やりとりしやすい」などの項目が含まれる。SNS 群の方が、他者とのコミュニケーション開始時の SNS の利便性を高く感じており、自分の表情や声を相手に伝えない SNS 利用の方が他者との気軽な関係開始が可能であることが推測された。しかし看護職を目指す学生では、コミュニケーションツール多様化の社会的背景において、初めての対面でもすぐに会話が始められるなどの初歩的な社会的スキルの低下が指摘されている²⁾。対人援助職である看護師は、初めて接する患

者や多職種スタッフへの対面によるコミュニケーションを日常とし²²⁾、対面での関係形成や親密度の増大には互いの情報源となる表情や声を必要とする²³⁾。看護大学生が対面でのコミュニケーションに効用を感じ満足感を得るためには、SNSだけでなく対面でのコミュニケーションを持つことも必要だと考えられた。看護師の養成機関では、4年間の学生生活の中でコミュニケーション能力を育み育成させることが期待されており、対面コミュニケーションの学習機会への創意工夫が求められると考えられる。

3. 看護大学生の SNS 利用による社会的スキルの特徴

本研究での分析の結果、SNS 効用認知尺度の高群の方が、他者に対して自分の意図を伝える「高度のスキル」や、対人コミュニケーションで自分の感情をコントロールする「感情処理のスキル」の社会的スキルが高いと認識していた。本研究対象者の看護大学生は SNS 利用において、他者に対して自分をどう見せたいか、自分がどう見られているか、他者が自分に何を意図しているかなど、他者との複雑な関係性や相互作用を理解しながら、コミュニケーションしていると考えられた。

これまでも看護教育では、社会的スキルの育成方法について検討されてきた。その中では、学年進捗に応じて向上が認められること²⁴⁾、グループ学習前後で向上の認められるものが少なからずあること²¹⁾などの報告があるが、これらは専門科目ごとの実習前後の変化を報告¹¹⁾したものととどまっている。SNS はコミュニケーションツールとして開発され、これまでの対人コミュニケーションの範囲や頻度を飛躍的に拡大することに貢献してきた¹³⁾。本研究結果では、SNS の利便性や効用を認識した看護大学生に少なからず社会的スキルの影響も認められた。ICT を日常で利用する看護大学生の看護教育において、SNS などの非対面的なコミュニケーションツールを用いた社会的スキルの学習方法を検討する意義は高いと考えられた。

VII. 結論

本研究は看護大学生の SNS 利用と、対人コミュニケーションの特徴を明らかにするため質問紙調査を行った。全ての看護大学生は SNS を利用し、ほぼ毎日の使用を経験していた。看護大学生は対人コミュニケーションでの SNS の利便性と効用を認知していた。ICT を用いた新たな看護教育を検討する必要性が高いと考えられた。

VIII. 研究の限界

本研究では、ICT 化を社会背景とする看護大学生の SNS 利用において、対人コミュニケーションの特徴を示したと考える。しかし本研究の対象者は、1 施設に所属する限られた人数であったことから、調査結果を一般化することには限界があった。そのため、今後は調査施設や対象者を増やし、SNS 利用が社会的スキルの影響する因子探索など多

角的に検討できる方法も検討したいと考える。

IX. 参考文献

- [1] 沢久美子, 木立るり子, 五十嵐世津子, 坂本保子, 木村緑, 田口千尋, 市川裕美子 : 看護学生における SNS 利用と IT リテラシー教育および道徳的感受性との関連. 日本看護研究学会雑誌, 41(1), 37-46, (2017).
- [2] 総務省 : 平成 30 年度版 情報通信白書, (2018) . <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h30/pdf/index.html>
- [3] ICT 総研 : 2018 年度 SNS 利用動向に関する調査, (2018) . <https://ictr.co.jp/report/20181218.html>
- [4] 青山郁子, 高橋舞 : 大学生におけるインターネット依存傾向, 攻撃性, 仮想的有能感の関連, 日本教育工学会論文誌, 39, 113-116, (2016).
- [5] 松田美佐 : 大学生のスマートフォン利用. 中央大学社会科学研究所年報, 16, 99-112, . (2012).
- [6] 厚生労働省 : 保健医療分野の情報化に向けてのグランドデザイン最終提言, (2017). <http://www.mhlw.go.jp/shingi/0112/s1226-1a.html>
- [7] 西田直子 : 電子カルテシステム導入による看護管理者のメディア・リテラシーと意識, 看護診断, 13(1), 13-20, (2008).
- [8] 川口孝泰, 豊増佳子, 今井哲郎 : 遠隔看護 (TELENURSING) による次世代訪問看護の未来—看護学と情報学の融合—. 東京情報大学研究論集, 21(2), 35-41, (2018).
- [9] 前原なおみ, 仲宗根洋子, 新垣利香, 吉川千恵子 : テレナーシング(遠隔看護)に必要な能力—4 つの文献から—. 沖縄県立看護大学紀要, 5, 73-78, (2004).
- [10] 萩原千鶴子 : 看護情報の ICT 化と看護記録. 臨牀透析, 30(11), 143-156, (2014).
- [11] 石光英美子, 古谷剛, 林美奈子 : 看護大学生の半年間にわたる臨地実習前後の社会的スキルの変化. 目白大学健康科学研究, 5, 61-66, (2012).
- [12] 藤野ユリ子, 室屋和子, 佐藤一美 : 看護系大学四年生の学生生活や対人関係に関する認識と社会的スキル. Journal of UOEH, 27(3), 263-272, (2005).
- [13] 大和田智文, 御幸大聖 : SNS コミュニケーションの顕在化に関する心理機序について. 関西福祉大学研究紀要, 20, 123-130, (2017).
- [14] Saffo, L. : The social media bible: tactics, tools, and strategies for business success. John Wiley & Sons, (2010).
- [15] 清水陽平, 中村裕美 : [ちょっと待って! LINE・Twitter・Facebook… 患者情報漏れていない?] ナースが知っておくべき SNS トラブル予防法. オペナリング, 32(4), 445-454, (2017).
- [16] 五十嵐祐, 吉田俊和 : 大学新入生の携帯メール利用が入学後の孤独感に与える影響. 心理学研究, 74(4), 379-385, (2003).

- [17] 神野美智男, 和田裕一 : 青年期のケータイ・メールと孤独感. 教育カウンセリング研究, 6(1), 11-21, (2015).
- [18] 菊池章夫 : Kiss-18 (18 項目版) (堀広洋道 監修/吉田富二雄 編 : 心理測定尺度集Ⅱ), 東京, サイエンス社, 170-174, 2014, (1988).
- [19] 鈴木英男, 遠藤真紀, 神野建, 松下孝太郎, 安岡広志, 新島典子 : ソーシャルメディアにおけるプライバシーリスクの盲点 リスク遞減に向けた論点整理. 東京情報大学研究論集, 18(2), 1-15, (2015).
- [20] 黒川雅幸, 吉田俊和 : 大学新入生における LINE ネットワークと友人満足感および精神的健康との関連. 実験社会心理学研究, 56(1), 1-13. (2016).
- [21] 廣瀬春次, 太田智子, 井上真奈美, 中村仁志 : 看護学生のコミュニケーション行動に関する研究. 山口県立大学学術情報, 4, 47-53, (2011).
- [22] 大井丈稔, 小野保 : SNS の利用傾向からみた看護短期大学生のネット依存とコミュニケーション・スキルの関係. 岩手看護短期大学紀要, (11), 53-62, (2015).
- [23] 福田正治 : 第 6 章 共感特性 共感 心と心をつなぐ感情コミュニケーション, 87-112, ヘルス出版, (2010).
- [24] 工藤千賀子, 原田真里子, 櫛引美代子 : G 大学看護学部における社会的スキルの実態. 北日本看護学会誌, 10, 45-51, (2007).